



明和二年

○三月七日講釈師深井志道軒終云々

塵塚後ニコレヨリ先淡州寺境内ニ靈全ト云
者辻談義ニ戯言ヲ交ヘ人ノ笑ヲ取ル然レモ
併意ヲ本トス志道軒ハコレヲ真似タルモノ
ナリト云ヘリ

神田白籠子ハ專テ諸大名旗本ニ招レタル者
ナリ是ハ享保頃エテ女シ先輩ナリ銀杏和尚
ナドハ前ニ引タル俳諧時味風ニ出ツ又風素
カ談化ノ州銀ニヨゴレ銀杏カ辯舌ニハ蘆葉

914.5
Ed

No. 819



富士川文庫

3614

張儀モ閉口スヘシトヤラ書タリ然ラハ此時

代大カタ曰シカルヘシ

○芝浦ノ一夫余の奥子ノ器名をマンボウと云

マンボウハ常州水戸ニ多シ日本橋奥市ニテ

往ト見ルヤアリ

明和三年

○香戸龍眼ヲ夜中池辺ニ萩と載ルモ香戸係有

此村作とあるの辺ニ盗神細細して住居の人
衣類を剥きてけり此剥きと吳名しけり子手
要名と致して萩と載り萩と云ふと一と一と
此とや否と云ふ

萩寺壽所係カ説聞傳ヘシヤアルナルベシ本

新石原辺ノ小路ニソノカミドツサリ横町ト

吳名呼ル新アリ遠キ事ニモアラズト老人イ

ヘリコレ天盜神出テ人ヲオビヤカシイルノ

意ナリト

口五年

○二月ニ於て浄土宗法儀と云

一ノ法刑と云ハ格ハおろし門徒と

オクテ門徒ハ平族東振コレヲ告テは復美下

カレタルハ去年十二月頃ノ夏ニヤ彼カ自ラ

此ニタル庫裏門徒ノ此一奉アリ其卯法ノ夏

妻敷イヘリ

日 六年

○日 八日(十四日)より湯島社地より和泉石津大社
別壽開帳 ニハ村巫女ニ人ニ其ノ事ヲ推して有
ルル名とおなまおまつとハ一經本春
位飾り出小多

春日閑話ニハユノエヒスタ閑帳二月四日ヨ
リトアルハ非ナルニヤ巫女ハフリ袖ノ上ニ
チハヤヲ着タリトカヤ神楽ミユノ美ヲ撰フ
コト是ナン備フナシケル

日 七年

世頃とんぶ桑屋ト云流ハヤル武玄明和七年
二月上野山下ノ桑屋女林屋お葉モトハ吉原
四ツ目屋ノ大隅トイヒシ妓ナルヨシ人皆ミ
ニユク名ツケテ葉カマ女ト云フ錦恵ニ出ル
又云笠森お仙他ニ走リテ跡ニ老父出居ルヲ
郎ニイヘルトカヤニ説何レカ是ナル思フ
ニ延享二年ノ春ノ時津風ト云奈白集ハ江戸
ノ名物ヲ集メタルニ其中ニ核買き巾ニ階小
とんぶ桑屋ノ下ト云句見ヘタレハ昔流ハツ
ケガタシ

口 八年

○三月初旬より伊勢志摩流行

銅脈カ勢多唐巴詩天世時ノ作ナリ糸京道中
ノ支種クイヘリ

○茶師坂と以てハ米津町一丁目二丁目と丁

目付地先上ありー入坂ナリーガ中岩埋立生
町店ト成茶師坂埋立地ト号セ

コノ入坂ノ中程ニ橋アリテ其法ニ物モラセ
ノ厄常ニ在タレハ世橋ヲ俗ニ厄カハシト呼

リトゾ

茶師坂埋立地ニ在母大坂下リノ曲馬出テ見
物多ク大評判ナリトゾ

○八月大風田取ノ切テ永代橋へ高マエ

アタルノミニ非ス永代橋ヲ突破リタルニコ
ソ両圃橋在右ノ欄干ヲ吹倒ス又三千七百兩

ニテ出来レト云東本願寺由堂モ梁破レテ柱
倒レ平地ニ根藉タリト云ヘリ芝浦津波本所

迎風雨ワヨク死人教ラシラスト云傳フ八月
朝日大風翌二日ノ支

明和年間此支

○曲事云昭和二年の以唐山の彩色招ふまじひ
 て板本師金六一りの板招ふまじひの板
 本へ又高と名。うくとエま一始て四五人の
 彩色招と製一出き一が福せり所とて招出は
 こと、かりぬ云々
 蜀山翁云は使非之又高と名。彩色招ハ延享元
 年の足名去古あつエまとそ一とそ一の
 彩色招ノハジノハ和僧ナリ四五遍ノ彩色ニ
 テアリレハ延享元年奥村文角が画ナド見エ
 カ、レハ蜀山ノ説カナヘリサテハ所ヨキ方
 ノ説ヲ細注ハレ悪シキ誤説ヲ本トシタルハ

イカニゾヤ若其誤説ヲモシルサバツレヲ舉
 テサテコレヲ非トシタル説ヲ本文ニカクベ
 キナリ其上コノ年間ノクダリニハシルスベ
 キニ非ス馬琴が誤説ヲ信シテ明和ノ系ニシ
 ルセルナリ

○富田楓ハ萩ハ落友ハが名頃新内節り

落友ハ楓ハヨリ後安永頃之
 歌集姑ニ用ル下カタト云鳴物世頃專ラ世ニ
 行ハル

○奥尾庵云明和安永の比陰荒猫の画か〜んと

て市中と歩けり一常州のそのわて居と雲友と
 いふ蜀山人の一話一云ふ其の意政の頃白仙と
 秋田上福の宮あり其の妻ありて福と伴と云
 きて社小一枝づいを納むとて福と伴と云
 福して福と伴と云きて言を以て部下と云
 且あし福と伴と云きて言を以て部下と云
 之は僅の候と云て臣と云福と伴と云
 之は僅の候と云て臣と云福と伴と云
 猫ノ佐カキノ一ニ説ヲ尋ルニ一説ヲ小注シ
 タル心得カタシ且何レカ先ナルヲ詳カニセ
 カル由イヘルモ日ク心得ヌ一ナリ世雨説者
 異ニテ時天人モコトナレハ昔後ハ自ラ明カ
 ナリ白仙ハ雲友ノ二ノ常レタルモノト知ル

へし

安永九年

四月四谷田藤新右衛門尉舎再具免あり云々
 内藤新右ノ一免ノ作下リシハ二月廿四日
 也四月十四日新右衛門尉見世用キ之新右ハ
 享保五年故アツテ廢マラレタリ其妻クダハ
 シレケレハ言ス夫ヨリ五十二年ヲ経テ明和
 九年領出ルモノ有テ又古来ノ通ハタゴヤ五
 十二朝銀盃女百五十人出来タリトゴ
 四月中旬録ノ片片ナルカ神志川海ヨリ上ル

内畑レテ臭氣甚シク見物ニ出タル人皆熱ヲ
煩ヒシト云

八月駿河國ヨリ雨降ノ兔出ル是ハ七月廿六
日武州荏原郡石川村ノ百姓孫左衛門トイヘ
ルガ捕得シニ

○八月十七日大風云々

八月朔日二日ノ大风雨又十七日ノ大风雨ニ
テ吹漬シタル氏屋は有内ハ数シレズ伊奈成
支配ノ関東筋土氏ノ家四千余別ト云

安永二年

○三月末頃ヨリ疫病行ワレ人多ク死々云々

疫病ハ去年ノ冬ヨリ引續キテ之呂川新宿ノ
内計リ死スルモノ八百余人ト云白戸町ニヘ
一町ニツキ人者五兩ツ、下サル

八月ノ初番坂妻村島町居主五々御牌千を
設持ニテ役義ヲ人ニ譲リ近辺ノ花街ニ緋細
セシガ病死セシヲ其友寄集リ日比散カ母シ
下ナレバトテ禰園指子ニテ葬送シケルトゾ

○安永の年の秋の病の災と仰てたゞ、病の如く小病
たゞ、若妻と云へて死して、ついで、一役小
病りて、ついで、一役小

口 三年

○二月八日ヒク川の石光寺法池如來同帳

二月十一日ヨリ四月十一日マテ之道ニ博談

多ク大ニ整昌セシトゾ

○三月十八日建部涼袋卒云々

涼袋トアルハ誤之建部凌雲モト真因ニ從テ

シカト其説ヲ非トシテ河州小苑杯ノ書ヲ著

タリ因ヨリ能信ヲ能シ世ニ片歌ヲ起サント

テ片歌道ノモトヨリ日ニ衣同吾ニ他何クレト

著述シタレ共終ニ行レス又信ヲ能シテ寒葉

舟出藩ヲ著ス如藤千彦ノ跋文多千彦モ重ヲ

以人ニ學ヒシニヤ先生トタバヘタリサレト

千彦ハ重ヲ能セス後世カ重ハ唐傳ノ流ニ又

致能モアリ西山物法本朝水滸傳杯ノ類ナリ

上方ノ人誰ヤラノ隨筆ニ謝蕪村ト世人ノ更

ヲイヒテ蕪村ハモノシラヌ不學ノモノ放蕩

ニテ家産ヲ破リ俳諧師トナレリ重モ佳足ニ

及ハス杯イヘリシカト蕪村ガ画ハ時好ニ叶

トテ世ニ稱セラレ後足ハ不遇ニテ用ラレス

恨ミナルヘシ

○九月廿日生土山聖天宮系祀神輿と云く一産
る所より出—使物と出と云く

聖天ハ佛ナリ神輿トハ如何又書中スベテ氏
子ヲ産子トイフモワロシ産土神ヲ云ふは
ト云産トバカリハイカバ氏子トイフコトモ
トヨリ今云氏子ハ義ナキナリ此書採ハ依
ニイフ如クモテエカイフヘキナリ氏子ノ妻
縣遊英覽會部ヲ見ヘシ妻長ケレハコ、ニハ
イハス

八月頃ヨリ五月十日淡州日輪寺に於テ能狂

言有テ見物多シ

四月頃西國ニ放屁男又世物ニ出霧降候男ト
云大評判平賀鳩溪放屁論ト云草紙ヲ作ル候
男ハ錦佐ニモ出

此冬寒氣ツヨク西國川氷リテ已刻迄毎ノ姓
兼絶レテアリ駿河ハ暖國ナルニヨリ氷ハ六
七十年モ見レ人ナカリシニ今年ハ佐播外ト
テタリトナム

安永四年

○紀伊國高野山御坊山子築地飯田町下信—

一終ふらゝし。が仙傳と名く龜山と号し後
難發して明西と云七年六十金歳して終る。元文
任たすて

元文ハ放博モノナガラ石ノ間ヘタル者ナレ
ハ此レモスヘシ然ラハソレガ跡ニ筆ツイデ
ニ子孫ノ変モ他タル由ナドハ書クヘクヤ其
レヲ何ソヤコノ明西カ変ヲ一糸ニ取り出テ
イフハ如何ナル心ニカアラン

○薩州多良毛ノ一釐猪ヲマアトクハ秋神田付
石所田村元雄ノ家ト云ハ後海州古堤内ニ

見世物ノ猪の大サヲテ皆小長きもの數百本
り名好子村ハ此皆逆立ト馬ノ鬃と云

山アラレハ豪猪ナリ釐字ハ非ナリマタ猪字
ニヨリテ大サモ真如シトイヘルモ非ナリ大
サハ兎程ニシテ刺毛アリ皆ハ長ク其餘ハ次
才ニ短小ナリ皆ハ長骨數百トイフハ其價レ
リ段ハ小ク體ハ田ニ刺毛象牙ノヤウニテ先
アリ末ノ尖リタル如黒ミアリ逆立ツトキガ
ラクト鳴ルト云此見世物也ラクハ偽物成ヘシ
其比豪猪ヲ薩州ヨリ龜政田沼主殿取ヘ歎ス

上覧ニモ入りシトナリソテ程マナク見世物
ニスヘキ様ナシ

安永五年

前年ヨリ真崎稲荷ノ番屋老婆ニ劇タル狐
ソレかおいでト呼ハル出ル故おいで狐ト云
見物人アリ

世夏遊治ノ女年木綿ノヒトヘ物ヲハレトシ
好ム藍返シト云深ナリ大丸屋ニノミコレア
リ撰撰剣先森房菊コレハ本町一丁目森長
ノ隠れが枕石之甚好ミニテ出来タル菊ノ小

伎ナリ

夏ヨリ探所楽正新道ニ女ノ力持出ルモトハ
大根富ノ娼妓ニトゾ力持傳ト云州紙出ル

日 六年

當年更州紙鱗形正野板徳川春町ノ画作又森
三ニ作大ニ行ハル桃を名儀日岫花見飯嶋呼
軽我杯珠ニ評判アリ



三月二十日夕六日影日夕て浅州子親也書
其ノ境内神仏無異様也 他人春町百卷ノ巻紙
品如所先生位たふひと 付ひ松石宗帳あり
ト拜之この所を中瓦ト云今ハ中四ト云

石菴ヲモキヲモヒノカナシニモ

今ハナカ田ノ里トコソキケ 百庵

カヘシ

世ノサカヲ今ハ何トモイハ枕

オモキヲモヒモ中谷ノ里 明河

イフ迄モナキ更ナカラ百庵筆記ノ文ヲ小注

ニナシ 智吾ノ歌ノミ 本文ノナミニ 文ニ書ル

ハイカニゾヤ

○八月十五日 日向院 江州 雲津長仲子

本曾義仲 彰信寺 本尊 朝日 延陀 如來 芭蕉 翁 像 完

帳

桃青カ更ヲ芭蕉翁ト謂レハモト其門人筆カ

程呼ナルヲサヲ又 悟人ホ事ヲ糸ヘス尊テ翁

トイヘルハイトヲカシ 桃青ハ何程ノ人ニテ

カク今世ニモ重シヤラル、カ解レカタキコ

トナリ 彼カ発句ヨキ句モ多ケレ氏今聞ヘタ

ル句トモノ内ニモ 放屁ノ如キモノアレド志

ク金玉ト思ヘルハイトツタナレ 彼カ正風体

ヲ唱ヘサリシ 前古風ノ頃ノ句ヲ見ヘシ上手

ノヤウナル 発句ヲラニナシ 宗因ホガキニ比

レハ大ニ芳リタリ況ヤ貞室ニ上ヲヤ若其人
ヲ後ノ世ニアラシメバ其代ノ風情ハヨムバ
カラズ昔ノ人ハツトメテ物ヲモ廣ク見ワタ
シ一句ヲモヨミ出ルモノハ年モヨク書キタ
リ
安齋隨筆安永七年五月晦日江戸ニテ大晦日
ト稱レ節祭ノ如ク至ヲ折厄掛ノ乞食出六月
朔日ヲ元日ト稱レテ川板ヲ立雜煮ヲ食シ屠
獲ヲノミ鏡餅ヲ設ケ町家ニテハ高ヲヤメ戸
ヲ立ヨセ簾ヲカケ買人來レハ雜煮ヲ出レ酒

ヲ進ハ宝祿ノ重ヲウル者モ出タリ江戸中如
此ニタルニハアラサレ且此更ヲナスモノ多
シモト若徒ヨリハヤリ出テ諸國ニ轉ヘケル
トゾ往國ノ土民山中ニテ吳人ニ逢ヒレガ如
此スレハ疫病ヲ除クト教ヘレ故行ヒ姪メタ
リト云フトアリ此正月ヲ學フ一ハ古クハ寛
文七年ニアリ夫ヨリ後ハ宝曆九年ニモアリ
猿蓑笠寛ニイヘリ

○六月朔日ミ田七月十七日返回洗ニテ信
州善光寺臨院如來開帳ハ村岡信長昌一ノ晩七
村岡信長昌一ノ晩七

と多しとて一つとて年法さるるの多し一ふ賀橋
溪島亭馬馬々求ふとて工史とて一少き足并
は者ふ六ふの石を取し又世おし出して利と
得しとてつふ又徳に源にや左ほふの何工よ
て飛んし其室とて一しとて又主とて仁并
やしとの形ふ化て一又と物鬼娘といへるえと物
杯いつまもるぬ
多しとて一とて

世時鬼娘ハ橋向ニモ似セ物出キテ是モハヤ
ル飛ニ夕其室畧係記ハ鳥馬述コノミセモノ
ハヤリテ西國ニ三ヶ所山下ニニヶ所出東夕
リ平暖源内カ此室生源氏金王様トイフ澤ル
リニ西國鬼娘ノミセ物ヲ作りタリコノ閑帳
ノ相巻リハ頓テ禁セラレタリ

○七月朔日とて湯島社北にて長州崎玉郡所為

北花字閑帳

此時北花^{イナ}へ奉公人トナレバ諸願成就ストイ
ヒテ清快ヲアゲテ奉公人トナルト半日閑帳
ニイヘリ

○閏七月十七日以善提樹の末つゝこれ善充と

如來の身指なりとて水草其馬糞小籠とて
あましとて風ま山人善提樹糸とて紐を板に
たり

安永八年

○小石川各量流小石所小町の差してありて七年
九百年迄小高き八月八日小流多執事ありての
忘ハ三月五日
日なりと云ふ

小野山町の七傳がニ遊カナラス忘日ヲハ何
ニシルシタル歟

○薩州産品川の卵へ玩球産の筆を給て給ふ
諸人にとと給書と
世小孟宗
竹と給と

孟宗竹ヲ植ラレシヲヤガテ諸人給責ストア
ルハ心得ガタキ書サマナリ世ニ責セレハ
後ノトニヤ

○十二月十八日平賀鳩溪年

平賀源内イカ本故有テカ米屋ノ牌ヲ殺書シ
タリトノミハ人ノ知レル如之詳ナルハ聞
へス昔日友人山崎氏ノ許ニテ其子細ノ書付
ヲ見シト有レカト今此腹セス世書付所持ノ
人アルヘシ矣在セシモノ、ヤウニ思レタリ
サレバ天恩ノ終リニハアラジ

安永九年

○六月大雨除候江戶を在人家と流一永代格
新大格落り七月らて未候

人々羅漢のうははは忘るすいぢやこの年ふ
んのトイフヲ産産ニモウタヘリ
七月時分金銀星ト云フカアラハルト評判ス
て星ヲ見ニ金星トイフハ心右銀星トイフハ
右白主ニテ吳ナルニアラス一時ノ妄言ニ

安永年間純莫

○銘 日五相
難日石川

○生 實 難 氏 崎 大 玉 屋 孫 四 々

世因銘ニ是ニ官銘ナレ又生實難ノ系下ニ
武松屋権ニモナキハイカニゾヤ

○在教師蜀山人唐衣楊州自柄器持

蜀山人ハ晩年ノ号ナリ世知ナドニハ書ヘカ
ラス四方赤良トシルスヘキナリ其上楊州自
持ハフルキ人ナリ烏亭烏馬予ニ流リケルハ
流がけぬハ其カミ真黒ニナリテ水アヒテ
井ラレシヲツレイザナヒテ楊州又レヘツレ
テ行リトイヒキ又カクカヅヘテイヘルニ若
紅湖鯉新ぬハ杯言ハサルモ非ナリ皆古キ人
ナリ今思フニ朱楽菅江ノあけら赤良ニ似タ
リ菅江ハ楊州ニヒトシキ頃ナリサレ氏聊ノ

迅速アリ

因ニ云其カニ四方が赤味増資セラレテ四方
ノ赤トイヒケルヨリノ号ニテ赤押ニ四方が
赤ノ印ヲトリテ用ケタル其印麻ノ地紙ノ形
ニ中ニニツ巴ノ紋アレハ晩年蜀山ノ号ハ蜀
ノニ巴トイフ一ニヤトヲノレ南畝ニ同シニ
吾サニアラス蜀山ハ銅ノ異名ナリト云ヘテ
レシ然ラハ赤良ノ赤ノ意ニ

○落一岫石井魯石

落一岫中奥ハ鳥馬ナリ未タ其頃ハ疑キ信ニ

ラ古風ナリ鳥馬カ祭会ハイツモ咄アリキ向
島ニテ新作ノ咄ノ奪ヲセシヨリ抄後キテコ
レアリ枝自他ノ咄平會ノ奉物ハ諸方へ持行
テ自ラヨミタリ今ノ如キ長キ咄ハ宗叔ヨリ
始レリ

○安永中鳥山横技花女流川と月妻と云々

鳥山カ瀬川ヲ身受シタルハ安永四年ノ暮ニ
又因累地花ノハヤリ出シモ日年ニ

天明元年

○三月八日新材本町在國師の在りて出火

和國録今ハナシ杉森イナリノ新道入口ニテ
橋ノ向ニニアリヨリテ世橋ヲ依ニ和國橋ト
イヘリ

○二月十五日ハ其田向流ルテ下依小舎一月
新地如來不動寺開帳

一月寺到基ノ日アマタノ虚無僧ニ行ニ列シ
タリ見物長ク出ル開帳モ諸人群集ス

日 二年

○七月十四日夜大村大地震諸人戸外へ出ル以
同女ノ地震ノ事ハガ

七月ノ初ノヨリ小地震ハ日毎ニアリ至十四
日子刻頃物音ヲヨクユリ出シ人々寐入頂ナ
レハ殊ニ驚クテ喜シ明ル日ハ空クモリ残暑
ツヨク日暮ヲ待カ子端井ノ涼居タルニ候ニ
ユリ出シ壁ヲフルヒ瓦落テ障子ヲ倒レア
ヤシキ家ハ見ルマニ倒ル、モヲホカリ地ヒ
ビワレテ氷紋ノ如シ八十年前元禄十六年大
地震以後カク甚シキ変アラバト百年近キ老
人語り又トイヘリ

日 三年

天明五年ナカノ月廿六日
 ナラシキヨリ未レヨ月未レテ
 紅カシ東ノ北南ニテ及テ
 初秋ニテ頃マテク。

○信州淡河山大坑大土焼
 夕七ツ時ノ西北の方鳴初
 中 雷 隆クヤ
 安中ハ三四
 下 畧

上野安中縣泥土ニ埋ミ破滅セシカハ領主板
 倉俵重代ノ畧物ヲ沽却シ國中ヲ沽ノラル其
 畧物ノ價ニ百兩餘ト云今ヨリ見レハ廉價ナ
 ルヘシ

○七月関東奥川筋飢饉

奥州筋飢饉ナリ川字ハ誤レリコレハ他國ニ
 聞シヨリ夥シキ事ニテ津輕領ナド病民難散

シ富家アル方へ行ケルヲ粥林ノ施行モ日々
 増シケレハ糧ヲコトハレト 次方ニ入込ミ
 シカハ後ニハ村塚ニ穢多ヲ出シ飢民ノ事ヲ
 取テ外ヘ去シケル山野道路ニ死骸充満シテ
 目モアテラレ又者操トイヘリ於種々ノ事ト
 モ書テスヘカラス人肉ヲモ多ク食ヘリトゾ
 十月八日牛込神乐坂行元寺境内ニテ親ノ仇
 討アリキ世変ヲ孝竹肥前坐ニテ浄ルリ在言
 ニ作ル松平一榮奉行所下宿相馬郡早尾村在
 主八右衛門但下百姓富吉心願ノ意致在ニ申

上はトイフ書付懐中ノ故ノ首ヲ切落シタル者ハ世富去付レタルモノハ日村百姓甚内トイフモノナリ福五二高村劍乃指南戸々崎熊右郎召仕初キ即ト云フ甚内高村ハ先ト海井小左衛門ニ言丈右衛門本年七秋の角力を小のひて言中ノ具ひもこと今年ト云

冬ノ角力具行ハ雨降候キテ日数延レタルヨリ遂ニカク成タルニ

天明四年

○四月く河川靈雲院て京泉涌と新迦如來肉自佛舍利異候

泉涌と開張ニ勅件の免ト云レマ立

○十一月相名相芝指櫓と以し時馬好し言を知り天冠將衣大の衣を着て出報一板小の女の速凡不可也

此狂言ノ天冠ハ笠屋ニ勝ガ用レタル物トゾ
狂言作者並本五親ガ所藏トナレリト云

口 五年

○三月廿三日儒師清田天錦卒六十七歳
子孔在楼

清田系錦ハ播州ノ養京師ニ位ス印シニテ終
レルヤ幕地ニ記サ、ルハイカナル一ニカ

○六月朔日とて九月朔日とて四向流して暖泉
新地如東開帳

暖泉ノ新地開帳^北津州ニ旅宿ス

日 六年

○正月元日西年とて年一割とて末一割とて日

録皆欠園東の如し

曆面トハ遠ヒテハ分許ノ日録ナリシト也

○正月申頃ヨリ日毎ニ風アラク物ノカハク

大ニテアブルガ如シトイヘリ

○五月の比とて雨禁く隔日ハ根カク一と七月

十二日とて別て大雨降後山氷ありとて洪水

と云ふ事あり

申入國後洪水モ度とアリレカ氏竟保ニ成ラ

殊ニ大ナル事ニイヒシガコトシノ水勢ハ丈

ヨリ四五尺モ深シトイヘリ今年田畠不熟ナ

リシニ今ハ聊ノ物マラモ流レ失ヒ人々困甚

甚也

天明七年

○五月ふむる未穀次才ふ迄一々對本穀と辨へ
たふ家とと歩穀との穀一ふ

天明元子年ら其方ワバキタル七年ノ山作ナ
レバ寒苦ニ天劇ヌレハ都鄙モロトモニ様々
ノ物ヲ潤へ食ヒレ故過キレ外年、如ク餓死
スルヤモナカリレカド其日暮、者ハ盲文ニ
三合ノ米ハ賣ラサルヨリ百計ニモ又ナド
聞ヘタリ

○十一月九日曉去原角町より出大廊中張ラズ
燒亡花川戸より穀燒亡 伍宅 大橋 則 津川 新 北 八
橋 分 中 街 百 永 町 言

神ホクニタラズ日 蜀山人ト書タリ且世世ノ伍宅ノ穀ニ
注ハスヘハ伍宅 蜀山人
コ、ニ天蜀山人ト書タリ且世世ノ伍宅ノ穀ニ
ハアラヌナルヘレ

日 八年

世頃修行者才奥ヲタ、キ光明真言ヲ唱へ歩
行クモノ多シ是ハ上州天竺ノ節死スルモノ
、為ニ唐カ子ノ百親者建立スト也

天明年間紀要

○ 重家山興 梅ヶ山 梅井

山興ハ氏ヲ一字ニ梅トモ書タル落款モアル

へケレヒ桜井氏ナリ次、秋山ニハシカ此也
ルハイカニソヤ秋山ハ山具カ狼之

○和歌素律歌古類鏡正全持きら、錦籠

素律部ハ麻杖トカケリ全持ハ全持ノ誤ナル
ヘシ全難之錦ノ字ニアラス

○歌仙去来三和

冬和ナリ三ハ非ク

○琴曲山田換技

琴曲世頃ハ山田松黒ニヤヤ子游松松青ア
リ游松後ニ山田換技トナル松青ハ其後松黒

換技トナレリ師承ヲ継タルハ是ナリ

○料理素律ハ一ハ野武素律杖ニヤ口所(具云)

と素律

素律ハモト素律バカリト云一ニテ素律計庵ト

イヒシカ計ノ字仲書ニ斗トカク故頃テ斗ト

字トナリシヨシ後ハ昔物語ニイヘリ

○舞屋宗助

任川所ハ舞屋ト云ハハ口テ料

宗助舞屋ト云ハ口テ料

祝河保ハ殿河保間ノ坊主トナリシトゾ

○坂中井、更云々
元禄ノ比去安井而一紀伊
西平文太所ヲ福屋所尾張屋

石法十郎方より始て掘り井と有るを一が石便
敷百金と景ととせとの人其後ととせし水法
かきと井戸と中との町外と井戸と
掘りし堀の面をちうと水法掘りといへり

大子宿とも出又主を任其神
徑文の遺居ハ初を法事とせし
ルニ地ノ揚を井ヲ設セシト云ハ世ノ

北女園部源ニ徒流云水道尾ノ変化文カ揚
町尾法在方ニ掘抜ヲサセ其呼井戸ノ面ヲ
レハ水道尾ト云トゾトハ其ニく敷書タル
ハ非ノ水道尾ノ名ハ元古原ヨリアリタリ経
図面ニ又明之
又云昔ヨリ古原ニ掘ヌキ井戸トイヘルハナ
ク五十年之前京深^{五月}末揚在町揚在清十郎世
幸ヲ深ク歎キ其編ナル秋系柱視ニ新リテ秋

揚在ハ井戸ヲ掘ラセシニ望ノ如ク掘得テ名
水ヲ得タリ此亦サニ其編ノ秋系ハ天井ヲ一
ツありテ幸細ス清水湧出ス清十郎カ井ナキ
節ハ橋場五郎イナリ又北馬乃伝其法ノ大井
戸ヲ汲レトカヤ

寛政元年

○七月七日狂豪師平候東北年云々

東作モトハ稲毛屋トイヒレハ夕ゴ原

○十月とくは名大川筋中川ハ善法中御薬

地不辨とくは聖年小つて元の水而く

淡州川ノ洲ヲ渡リ湯田川土手善持ノ土トナ
ル土持人足カヨヒノ為ノ仮橋カ、ル
中洲取掛ヒノ時

左根亦モヤカタモ今ハ古用紙

チツ、シハ止ミワケワシ 行

寛政二年

○永代寺少々、主於大内此内雜取天宗帳又世物
小壬生相之と出せ世ふりして兩國小旅して又
せよめと、韓間の書も活安の具ふこととまか
へて

世時壬生相之ハ大ニ流行リテ兩國ノ見世物
ニモ真似テコレモハヤリヒガ雜天ノ用帳ハ
流行ラス

八月廿日大風雨淫川出水奔々家ヲ吹流ス

○十一月琉球人來聘

琉球人江戶至見物多ク怪我人アリ

日三年

二月上旬元淡町ニテ物ノ子角アルモノ生ル
耳ノウヘニ指ホトノ物アリシナリ云ニ訴へ
出ル

三月十七日ヨリ淡州方親世音用帳

世頃所々押込付、蓋紙有る由町浪り中合石

拵推テエ不及歩殺可訴出四月六日は觸アリ

所法寺改教々条官板ノ冊子江戸中地主家持

等ニおぼゆる四月十七日

○五月十五日東九ツ村分大雨雹交々

電ノ目方三餘余行也

此節本所ニツ目通也表長衣家疎ラス風ニ破

ラレ柳川ニハ日敷立タル死人落テアリ

○六月如茂縣主季尊佃島往去の社前へ碑と立

了 福七糸神の支勅信の事と述へて其次云元

人姓と十組不ちて性来の取つたはなりある

久人存小万也と勅事と杖と定めろ、洋中の

比女子ととみそとて社とおごもろ小祝を

此碑ノ條イカニゾヤ

元禄中十組出来レソノ支ヲイヒワマタ正保

ノムカシヲ述此畧文ニテハ一向ニ心得ラレ

ス

○医学館日律始

醫學館初ヨリ有之シ事浙銀差出スニ不及音
十一月は船アリ

○八月六日大風雨小田原辺より江戸迄海辺より
潮上り

八月六日大雨夜ニ入テ大虎窪川大水廻船ニ
渡相川所ノ河岸ニ吹上ラレ海辺橋落ル沙先
辺家流レ人死アリ行徳江橋辺迄モ人多ク死
ス大川筋大水新大橋々杭一本抜タリ利根川
筋堤切テ東葛西大水コレ大虎諸團ヲナレ
日本橋西河岸杯モ注来道ニ水上ル日月亦日

相曇リ重ヨリ晴暮ヨリ雲起リ海鳴り夫ヨリ

大風雨人ミナイ子ズ明七ツ時ヨリ風雨止

九月三日雨フリソノ夜大風雨日四日雨小フ

リニナリシカド風程ハゲシク乙刻大津波ハ

月六日夜ヨリハ強ク重ヨリ晴世節廻船三艘

吹流シ永代橋々竊抜一艘ハ橋間ニカ、リニ

艘ハ中洲マテ流ル橋間ニカ、リシ船ハ八月

六日相川河岸ニ吹上ラレタルカ深ニ出シ

葉テアリシヲ又々風波ノ為ニ深ニ出タリ

是バカリハコボレ幸トイフヘシ又新坂陸舟

倉吹漬シ洲邊ハ先ノ嵐ニ残リタル人家残
ラス流去八月ノ水ヨリ一尺余モ高シ
関東上方モ大風雨ニテ米價俄ニ騰踊シケル
ニ云ヨリ^兼余セラレ兩ニ七斗ヨリ高ク賣買
致ス間或トアリ甚ニテ諸士ハ借米有之
白米亦賣百文ニ九合一兩日ホド賣リレガ一
年一合ニナル世節法仕法諸人有ガタカリシ
ナリ
九月十五日神田は糸礼出シノ外ハ大神乐拍
廻シ子供角カノミナリ世時落書

中系ハ日出タイヒレノ世吸物

出シバカリニテミドコロハナシ

十二月十日行徳之親寺ニテ茂本村流死人施
飯鬼アリ武州葛掛郡村方へ日向院相廻リセ
ガキ法更アリ

寛政四年

○四月の比々米價登揚也

登揚ノ事ハ非騰踊ナルヘレコノトキ云儀ヨ
リ以米江戸中着米毎ハ在後者之
四月神田川筋川浚アリ

日 五年

四月十日浅州福井町一丁目ニテ太子四足生
ル内一足四足ハ夫ニテ面ハ又ニ似タリシヤ
クマブレテ因ク鼻高ク様ノ面ニモ似タリ四
ツ時スキ名主淡路次ニ清方ヘ町内ヨリ持行
奉行所ニ訴出即日見分有之テ奉行所ヘ持
来ノ一母夫ノ乳ヲ飲セス地ノ食物落テ杯ニ
ニテ養ヒケルニ頓テ斃レタリトカ

○九月先達ノ魯西虫ノ漂流して功報と云ハ勢
白子此取改奉古史秘古江ノ事

源氏見覽ノ記ヲサシテイヘル
ニヤ全州此ヲコレテ別ニ述出
ト云忍々信節氏ハ何ホノ原
ヲサシテイヘルニヤイト書サレ
興記

世時漂流ノ兩人吹上ニテ信覺アリシニ官医
桂川氏ト同吾ノ書タルモノアリ寺右史ト申
合ニヤ偽リコト多ク見ユ

七年六月亦一日築地本願寺本堂再建上棟見
物群集

日 六年

世節羽州ヨリ大臺山文五郎ト云子供ノ角カ
取出ル末ニ書ルハワロシ信節トハ四月頃ヲ

二月ノ末下ニ此ヤ
レヲ以テトク具云

當七月日ヲ夫ス壹九ノ時頃ヨリ大風雨下谷池之

智別ノ風ッヨク雷光夥レ不思池ノ上真黒ナ
ル雲起リ其中ヨリ火ノ玉飛走りタリ四五丁
眼ニ明照寺結念寺トイフ寺ノ屋根軒口ヨリ
引ハナレ行法不知破目鬼尾ノドハ四ッ谷在
ハ店タリ井ノ取池ナトニモ落タルヨシ其節
イツレノ家士ニカ馬上ニテ供八九人モ連タ
ルカ通カ、リ馬上ノ人行法シレス供人バカ
リ残リシトナリ皆人魂ノ奏タルナラントイ
ヒアヘリ

日 七年

○正月九日谷風旗し助依

勝川春英ヨク谷風小野川カ有像ヲ書タリ其
他モ多カレドワキテ谷風が有魚ナラテ八角
カ取ラレク思ハレ又程ナリキノワラレキカ
士トイフヘシ

○三月十八日くろく十日津州親要寺同帳内雷
神門再建出テ三月十日ニ神ト安島也

雷神門ノ真中ニ懸タル為人格ト書タル挑灯
ハ此時作ル衣根左右^左法門コレカ積負ニテ
衣根ヲ着テ挑灯モ其職人ホ奇等テ扱メシニ

○七月八日市川鶴鳴卒ス

市川鶴鳴ハ尾張ノ豪家十代舎影シク菴書アリテ志アルモノロハ家ニ留メテ書ヲヨマシム鶴鳴モコ、ニテ多ク菴書ヲ讀シトナシ○本居宣長カ菴書ト云書ハコノ鶴鳴カ主クノ

別出トイフ書ノ逆書ニ
鶴鳴ニ子アリ貞を郎次男新を清ト云次男モ學少乏シカラズアリシガ若クシテ身マカレ

寛政七年卯七月十三日ノ表直呈月ノ左ニ附

テ著時ヨリ見ヘ五ツ村頭ニハ月ノ本ノ方へ
月中ヲ通り格ケテ出ル

日八年

二月廿日大陽宮同敷

二月四日快晴夕七の時頃御ニ空カキクモリ
雨ハ降ラス只雷鳴ノ如ク辰巳ノ方ヨリ西方
へ鳴返ル

○芝泉岳古敷近ハ相曼至羅因根義士の遺物と
見と

赤穂義士年忌ノ帛アリ

○六月九日鳥越明神宗礼神輿と海へ出へ係由

等出—たそ中後ハ中後也

安永五年糧芒花サツマ生ニテ志願昔八丈ト
云新洋ルリ大畜ニテオニサレト云文句兎重
コテモ備セリオコマ船トイフアノ妻出テ一
時ハヤリ又世銘賣島越神多礼ニ奴胤ニナ
リテ出タリ
今年五月下旬長三寸五分横四寸許ノ糧淫衣
中飛行シテ人ヲ刺スサ、ルレバ大病ヲ煩フ
ト云妻專ライヒフラス又國ナドカキテモテア
ツカフ

日 九年

○二月廿八日狩所細春卒

細春ハ近世綿ナル能急ナルヘシ

○七月十日中村佛庵呈蓮此蓮大工中村信吉史書と云々

ノ室其子宗錫と伴ひ津州ヲ親せき一話—

船中大川の辺よむと—此水面小天満宮の本像

と似て享和元年深川法禪小安也

中村信吉史ハ好妻ノ故を申トヒトシキモノ

ナリ兼ブ物何ニヨラズ何傳来何人ノ名作ナ

ドアラヌモノヲシカイヒテ人ヲ欺キ虚ヲ法

佛庵高尾ノシカケト云モノナリ
ナ御機ハ装し帯ニ着用セシロシ
其鏡鏡ノ人ハ活ナキハシカケ
由是イマノモノカ 緋機

リテホコル癖アリ
世天神モ丹ダメテ古道具在ニテ見有タルモ
ノナルベシ後ニカク書ケルモ即チ欺レタル
モノナリ

寛政十年

○四月金彫工大森英秀卒

英秀ハテルヒデナリ高浪ノ彫物人ニ責セテ
ル

○五月朔日岳川沖ヨリ懸上ル長九間一尺高一

丈余のク
ハ何と云ふの事乎
ハ何と云ふの事乎
ハ何と云ふの事乎

以テ大佛の像と送テ相油ヲ下包
海上ト云ふ事ハ見ヘテモ

世仍リ物ノモルシ様ワロシ岳川海晏寺中

用帳ナリ銀唐ノ本ヲ中ニコノ相油合用ヲモ

テルシヤナ佛ヲ作ルヲホツハ密相籠白毫ハ

銅ガラヒ指ノ爪ハスゲ蓋ニテ有シト覺工合

羽大佛像起ヲ芝全支此レリ韓履スヘキ支ナ

リ。其比深川洲崎辨天境内ニテ遠眼鏡ニテ

世造リ物ヲ見ヤタルハ目カ子ノ中ニ作りモ

ノアリシナルヘシ

岳ハ岳川橋師洲沖ニテ突苗タリ脊通り長サ

九間一尺高サ六尺八寸色ハ青ク黒カリシガ
次方ニ黒クナレリ

十一月十二日新大橋向窪川富橋町ニ款討ア
リ南塗師町權ノ倉山傍有能儀家ノ墓ニ
門人娘モリ十六外一人窪川森下町有能儀
手跡指南平井仙柳ニ十款ハ寄合神保老系家
素崎山平内ニ十手海ハみきニ所モリ六所仙
柳ニ所平内七所

口 十一年

○八月青山海病ヲ檀衣和系屋推古御ケル家小

一此立尾あり刑器の首長六百と行々高サ十葉
供養の塚を建ス

也俗ニ刑録ノ首ヲ承メ新領ヲナシテコレヲ
葬リ吊フ者アルハ此時ヨリ起レルナル可

日 十二年

十月九日奥州仙臺ノ者徳カ豊泰ハ対決州住
在前片町ニテ款討アリ

○今年富士山へ女人ノ墓詣ヨリ
南年庚申六十一年月ニ年富士山へ女ノ禪定

ヲ評スト云フ

○浮世伝類考成画本一巻

浮世伝類考ハ元春花園ノ輯録ニテ浮世伝類
系トイフモノハ本銀町遊蕩屋新七カシルセ
ルナリソレヲ附會シテ春花園カ後書ルハ度
申ノ中夏トアリ山東至傳ソノ述考ヲ書タル
ハ享和二年壬申冬十月ナリ浮世伝類考述考
トイヘリ

寛政年間訛妄

○儒家山本北山狂歌師重衣楊洲浮世伝師北尾

改演 本付 口改美 蕙高 窪俊満 相花堂ト号 葛飾北

高

儒家ニハ市河寛高葛西健花柏本如亭佐藤権
菴尾藤良助歴々タル名家狂多カリ

狂歌ハ三泥羅法師浅州庵市人ニ世業揚庵干

則又多シ

俊満ハ職人ヲヨクツカヒテ泥へノ指物ヲ法

取テ巧者ニ注文シタルモノナリ改演モ重ハ

自分ニハ其志アルマデニテ書コトハナラス

大方作筆ヲタノメリ俊満ノ左手ニテ手ハ達

京傳ハ重ヲヨクモリ

後ハ跋ナラン

者ニ書タリヨキニハアラス
北斎ハ重風癖アレ其徒ノツハモノナリ政
美ハ雜髮ニテ狩野ノ姓ヲ受ケテ信真ト名乗
ル是ハ彼等カ富強ヲ出テ一風ヲナス上手ト
スヘシ信リテ云北斎ハトカク人ノ真似ヲナ
ス何ヲモ己カ始メタルイナシトイヘリ是ハ
畧虫式ヲ蕙高ガ著シテ後北斎漫筆ヲカキ又
信真カ江戸一覽圖ヲユズセシカハ東海道一
覽ノ圖ヲ錦重ニシタリシナドヲイヘルニ

○宇田川其随

宇田川ハ後ノ玄真其男松庵共ニ蘭學ニ長シ
タレ氏玄隨ハ漢學モヨカリシニ

○淡州ヲ隨神門前ノ桑原菟波中のおきゝ菟原
新日方崎のおひさ其神前前日菟波のおきゝんこ
は三人菟波のおきゝあそび陸崎とやゝゝゝは衣
小菟原人引まきり

隨神門前を見物ノ人込合テ年ノ市ノ群集ニ
似タリおきゝが桑原ノ前ニハ水ヲマキタリ
兩國ノおひさカ在ノ前ハ左程ニハナカリキ
州おひさハ赤澤町ホウトル田ノ横町ニ菟原

屋今モアリ其家ノ婦ニテアリシ

○ 婦女のたがさーゆーびもやり始む

夕ボサシモトノ物トハイタク形異ニシテ光

ノハ鯨ニテ造リシナリソレニモ新田アリテ

形ノ異ナリ只再々ハヤルトノミイヘルハイ

カ

○ 靴魚の歌止り

靴魚ノ夏ニ嬉遊笑覧ニイヘリ

○ 児書の残り切り組燈籠魚ハ上方下り此ため

なり

ま右様ハ末の生海大坂の天満宗の国拓と重板

とて寛政享和の改美多々画き又此高と後て

画々々

浮画ナドモ此高ハ蕙斎カニノ舞ナリ

○ 書局局と彩を招き一て高

封筒ハモトヨリ彩色スリナリ朱氏淡竹ヲ見

ルヘシ

○ 明和安永の比して世上凡俗の版匠男女の情

如雅のこみあつた編輯多くは至代大小世小好ま

山 東 系 活 字 此 一 度 玉 勅 態 音 此 小 行

いとたそ

田畑全買ノ傾掛尾ノ巻、鳥山カ支ヲカケリ
研習酒落本ノ原メニテ女郎買ノ草紙ナリ又
カモノナキハ深因カ天初ニヤレカウベノ縁起
菩提樹禪其外アマタ皆小本ナリソレモ根を
草マテハ大本ナリ仲双紙トニヤレ本トニツ
ニカハル花巻能ナドイフモノハ袋入ニテ一冊
之コレラハ今ノ仲ノウ儀ニヤレ本トワカラ
又モノナリ実ハ落レ祐レノ類ナリ後ニヤレ
本トイフハ皆好色淫情ノ奴家ノ話ナリ外揚

所ノ支ヲ書シハ蓬萊山人帰喬ガ遊里輕談又
辰乙園ナドナリ後ハ是ヲ小本トノミモイヘ
リ京傳カ錦ノ表去原揚枝ナド行レタリ又深
川ノ事ヲ書シハ杜撰文庫志モ行レタリフル
キ人作ナキ頃ニテ寛政三年支ノ春山東京付
奉行所ヨリは吟味有テ奉領ニテ所内領ケニ
ナリシニ後女郎買ノシヤレ本ハ作ラス時勢
ニヨツテ草サウシモ教訓ヲ加ヘナント子供
流合点カト云フ支ヲ作レリ教訓モ其以前
下手談義ナド大ニ行ハレタルアリ是ハ大本

ナリ善玉悪玉コレモ悪玉ト云フコトバハア
リレナリ

享和元年

○正月十八日重人北山寒巖年名孟遊枳場
住保寺ニ葬

寒巖ハ本姓馬氏北山権助ト云字文圭画法
ハ其又馬道良ニ受ク山水人物花鳥イワレモ
工ミナリ又ハ大右郎ト稱ス人物最モタクミ
ナリ尚時江戸ニハ比ナカルヘシモト下谷ニ
住テ某典カニカアリシガ後真崎トヤラシノ
神主ニナレリトイヘリ

○六月十二日板橋右板橋水車口下ニ有奇臭と
稱ス名五尺一寸板ニ尺五寸四寸あり僅小ニ
寸余巨口楳目ヤシク信々色栗のこくくあり相
似

本草個目ノ親臭ナリ身山椒臭トイフニ四寸
ノ大サナルモアレド大ナルハ三四尺余ナル
モアリ霜根山ノ山椒臭トハ異ナリ山椒ノ名
ノアルハ其臭似タル故ニシカ呼ヘリコノ
臭江戸ニハ稀ナリ先年親物ニ出タルヲ寫生
シタル事アリソレモ三尺余ナリキ

享和二年

○二月より四月の間に此所流行の疾は一由故未
録と下し、俗に七凡と云ハる所也七の
小唄よりやうり

小唄ニハ非ス田舎風ナルノツキカラタリノ
イヒタラテテ年ヲウケツ、白キリヒテイフヲ
小唄カマ子タルニ

○五月本元才在とワ人焼画と再興一會席
と録

後文政頃白紙トイフ者焼画ヲナシタリ其後
相ノ箱ニヤキ重ヒタルカ様ニカズ物ニ任入

タリ

○七月二十三日画工董九如年号彦川 族士清年
法書古小書

董九如字仲泉一号黄圃又翠川ホノ茅アリ井
戸甚助ト稱ス江戸幕府ノ士ナリ画ヲ末世在
ニ崇ヒテ後一家ヲナス著色花鳥墨竹ナド品
在モ高シ

享和三年

○四月より六月の間に麻疹流行人多ク死

此節落書

江戸中の様子

そやうハ医者ト云ハ人まけ人へき

ハシカモ社ラシカリシ故人死モ多カリ生後

ハ住ミアリテ死スルモノナシ

○六月朔ヨシ津州信住院ヨリ信州岩光寺如來用帳

善光寺用帳不あり

用帳ノ御手ノ糸コソ狂アラノ

アタリハヅレハナキト聞シカ

○六月廿九日國學者大塚嘉樹卒 終一六七歳門下著書七十

淡州本覺寺ノ華

大塚嘉樹ハ國學者トハイカバイハユル者歟

衣ナリ伊勢貞丈ナトモ物トモ聞レシ人ニテ

其子甚モ世人ノ才子ナリ

當夜兩回川花火祀アヤマチテ火ヲ落シ載タ

ル花火ノコラス火移リケレバ人々皆河ニ入

テニゲタリ其内花火玉瓦ガ碎モ俱ニ水ニ入

レガ溺レ死タリ淡州寺真山庵カ子ノ地蔵ノ

祀ニノリタルガナルハコレガ吊ラヒ供養ニ

建タルナリトゾ

玉ヤフル火花ノシカクニクジリテ

カラククリ前モ水クハルトハ

○八月谷中延命院住持月道僧律と在り、農科ノ
文セル事トハ...

延命院ハ大事傳之

七面ノ四方八面ニリガワレ

クメン遠テ顔ハジウメシ

○七年二月中旬より浅州田圃立花侯以下藩誌
寺古郎稲荷社利生あり...
全五の表裏集信群集おし...
のちよの歌...十五日二十八
日の年の日...
ア...
ア...

沼畔葦店と列ぬて... 一二年... 自然
止...

二月以差糸ノワイゲ新テミツルニイマダ...
レク只一人リ二人リ集結ナリシガ...
ニ山伏ヤウノモノモラヒ居テ念シ奉ル右郎
稲荷大明神何トヤラ唱へタルイトヲカシク
思ヒタリ社既ハサセルナキ小ホコラニテ
イヅコノ者戸ノ稲荷ニモカバカリナルハア
マリ寂寞タル者様ナリシガ其後イヨコハ
ヤルニツケテモトノ洞ヲ隠ササトシ右郎

イナリハ別ニ社ヲタツモトノ祠モ建直セシ
カイトヨク壯ゴンシタ其村ハ新地堀本願
寺ノ横手圍ヒ込ニナラガレハ彼福弁ヘサレ
テ行クニ菊屋橋両方ノ坂ハ夕通行ナリシカ
ハ桑トセ食物店立ワラ子供物ノ百保ツナヘ
ハ火ヲホカケテ祈ニニウル信人ハ一團ノ人
在セルニ似タリカク盛リナルモ衰フル時ア
ルニヤト思ハレシナリ

享和年間紀要

○小倉井村の格享和の比より駿人墨吉の如く

集ひて毎春花親の祈りあり

秋田ノ梅見ニ駿人ノ出ルモ口ニ頃ニヤ

○山東京傳由事馬琴ガ讀本州双併村より年々
敷本と様形と武事之馬六掛圖紙盤一返舎一九
振事梅著里石哉

ヨミホント云フモノヲカシキ文章ニテ又ノ
リタル処ハ上ルリニ類シ古語ノミユルハ下
ト後世カ西山物語ヲ奉本トシタルナリフツ
ツカナル横ゲワヘトイヘルタグヒノ一書ニ
但シヨミ本ハ馬琴ガ作時好ニカナヘルモノ

夕レ柳亭云曲亭春傳寫之能ニテアタリタル
ヨリ色情ヲ常ニ義理ヲメニ作レリ色致ハ瘕
情ニテサル変テアラストイヘリコレ又柳亭
カ子簡ナリ論スルニタラス柳亭ハ看卷ニテ
モ子リテニクマレ又変ヲノミテモヘリクサ
双紙ハ京傳マサレリサレド在ニ全交春所
ホカ尾舞ナリ後ニハ年々浄ルリ和言ノヤウ
ナル故討ニナリタリ是以前ヨリ東ル年々
討バカリ作リテ在タル者ハ楚滿人ナリシカ
遠ニミナ其変ニ成タリシコバメヅラシカラ

ス柳亭正本在立トイフヲ作リテ在在在在
張ヲ佐ニ重タル如キ者トレテ行ハレタリ
ライハゴ聊ツ、莫タリ焼タリシタル意ナリ
真カミ草サウ紙ハ名ク新亭ヲノベテ在ニ二
カ並指ニ臺國佐長生見たい記全交カ十四個
併腹ノ因鼻ノ下名物語ナド殊ニ奇作トイフ
ヘレ三馬ハ女レ源内ガ句調アリテ悪マレ口
ナリ手ハ達者ニ書致作者ニハ能書ナリコレ
モワレヨリ生タルハナク多クハ人ノ真似ヲ
レタリ但レ活世凡品ウキヨドコナドハイト

オカレ振警亭ハ清長カ才子ニテ重テカキタ
リ狂人ニテ教向具セズ一丸ハタビシヤラク
ノモノニテ人妻殺アリ京傳ハ罪ナクテヨシ
トホメタリ膝栗毛ハ江戸ノミナラズイヅク
ノ人ニモ笑ハスヨキ教向ナリ○右儀ナドハ
ニ筋道ノミノ作ナリソレモ初篇ハ冬ト夏ニ
テ二筋ナルヲ行ハレシユヘ跡ヲフギテ文里
ガ事ノミナレルハ二筋ノ道ハナクナレリ
○銀盃ヲ出サバ真龍天出スヘシ月ノ骨部物
活其餘精アリ

○享和ヲ末系傳の偏多クを世奇跡考骨董集ニ
載の往筆也小引也——トモ此傳載ニナシトテ就
作去者往筆と云フモ其意如何トモ其意を末傳の
傳小引云々の如ク却部ナリト云フ

サテ友ニ奇跡骨董ノ二部引ハレテヨリコノ
傳載ニナラレテ却作者を隨筆ト出ス云々ト
イヘルハ睡餘小録選魂代耕用権柄ナトライ
ヘルニヤ
又云然レ氏京傳ノ作ニ並ブモノナシ云々トイ
ト心得ス

奇跡考ハ古魚ノミナラス新圖ヲ作り入ルハ
特ノモノ普通ノ事ニテ嗚呼タリ冊ノ類多ク
アリ芝居役者杜女ノ一枚出ナド出シタルハ
寸錦雜俎ナドアリ殊ラシキ体ヲシラス且其
説誤リ多ク殊ニ不出本ナルモノナリ又骨董
集ハ自序メクモノヲ後ニカキ初ノ二冊ト次
トハコ、ロバヘカハリタル著述ナリ引書ニ
ハ一ニ書名ニワクラ入レナドシコレハスベ
テ古圖ヲ出ス中ニヒクメニハスヘテ考廣
カ新画ヲ出スカヤウノ一スヘテ或他者ノ具

氣書物ノ体裁ニアラズ且コレニモ誤説多シ
タレカコレニ習フ者アラシ曲亭ガ燕石雜志
煮雜、祀ナトハむモ多シ柳亭カ在華ハカナザ
ウレノミ引テ作レルハフサハシクシテ誤リ
イト也レ勝レリト云ヘシ

○享和中よりあつたけん菊嶋とソノ人古嶋村
小花園を誤り四村の花ヲ載て北葉のふとなせ
玉葉抄の人として註北平
北平が事モト桑がラク高セシ者ナリ初メ大
門通て横店ト称スル如ニスルヲレヨリ徑去

町ウラニモ在リ好書者ニテ書出ラスキ
大雅堂履筆ヲ多クナシタリ文字ハナケレド
モ諸名家ニ立入ナクサマル、ヲヲノレハ得
意トシ遂ニ梅石表ヲ思ヒツキ諸家ニ著リテ
梅樹ノ料ヲ求メ乞ヒ詩ヲ集メテ盛音集ヲ板
ニナシテ人ニ呈ス名家ニ嘲笑サレタル文
ナドヲヨキコトニシテ黠尾ノ棍トナラント
ス梅石シキコトニ能テ成物ス其後友ニ道具
市ヲ立素人喜リモノ共會合ス果ハ金子ノ賣
買杯ニ至リイワモ會ノ終リハ和娘ノ吉原町

遊女屋ニ移シテアレハ夫カトコロニ諸若ヲ
誘フ移レナカラ道具市不正ノ聞ヘアリテ終
ノラレ入牢シテ過料並放サマニクナリキ
素人道具市盛リナリレハ西河岸ノ面且ホ在
立ノ頃今ノ長谷川町ノ大和町在カルトイヒ
レモノ伊勢町ノ家ニテ其宅ニテ月次會アリ
リシ時節モツハラ行レタリ彼一併アリテ以
変ヌタレタリ

山谷町八百屋善四郎が料理料も、河川土橋
平橋下石龍泉寺町の駐春寺の文化年中も豊

料理ハ本海町ニ大坂在森ハトカイヒシモノ
評判アリ又會席料理ト云フ莫ハ菜研堀ニ川
口忠セト云者姪ム
コ、ニハレルサバレ氏食物美ニ至レル中ニ
菓子ト鮎トハ殊ニスグレタリ煉羊羹鳥羽玉
ナトハ和屋志津ナヨリヲコリ鮎ハフマンズ
ヒ毛扱ズシナドヨカリシモ古風トナリレハ
涇川ノアタケ根ノ鮎ヨリ莫シタリテンプラ
ニハツ經マデ用ヒシハ本原店ノ者ニ清ヨリ
ハジマルコノ中菓子ハ寛政ヨリ餘ハツノ後

ナリ

文化元年

正月、末葉地門福へ京都ヨリ百五十人評リ
キタリ評フ宗義ノ莫トイフ服扱侵拭リニテ
既取ノモノ入牢ヒテ莫辭ル
五月十六日西本右衛門他板被作有ハ板大板
板元ニヒ作海江ナニテハ右衛門ノ中ヨリ扱
出シハ分モ不残活ニ上右錦魚書タル森多川
歌凡歌川本國ナド手領板元十五貫文過料ノ
ヨシ後草紙屋へ申渡書付アリ

コレハ其頃牛園大錦画ニ明智本能寺ヲ圍ム
所其外色々書テ外メラレシニ画本右園此ニ
ヨリタル由ヲ陳言セシカハ画本右園此ニ災
及ヘルナリコノ危板ハ惜ムヘシ

日 二年

二月至神前宮境内少テ勅進角カある一対日
十六日八日月具日水引とツ角カ在考の者
と喧嘩小及ハ四ツ車一人加勢一ツ大勢とあま
少一ツ聞詳小及

此時爲ノモノトモ町内ノ半鐘ヲナラシ人集

ノシテ向ヒタレ氏四ツ車長キ階子ヲ奪ヒテ
フリ廻シケレハ誰アリテヨリツク一ナラヌ
只人奈ノ屋上ヨリ瓦ヲ擲ルノミ

文化二年 月。文。去子九月魯西亞取ヨリ送り
来ル奥州宮崎郡寒風津溪長九ノ將水主左平
且四十三歳日所喜々々將津古吏日六十三歳
日園桃生郡深谷室溪原と郎將水主依年日四
十三歳日所右十郎將水主左十三十五歳十三
年之前是十二年廿七日石ノ春淡出紙雜風ニ
テ湮流一併アリ右口書ノ中ニ是年依地へ漂

サント奇怪ヲイヒ簡シ自撰ノ鐘學任ト云者
ヲ板ニホリガ子共ニヨマシノ其間ニハ創術
ヤハラナドモ教ユガ子ヨリ金子ヲ集メ本湊
町ニ町西表ヲ求メ作事シテ學堂ヲ立其比
予カシリタルモノ、將モ其社中ニテ又淺州
田原町ノ袋物屋越川ノ將モソコニ居タルト
ナリ

文化三年

○三月三日永代ちかて成田不動寺開帳

○三月四日宜九時芝車町より出大陣烈風

コ、ニ宜九時トイヘルハ非ナリ世大夏ノ相
用夏アリテ神田ノ土手下マテ折シハマタ四
ツ時分ナリ風烈シク塵タチテ日ノ色黄ハミ
タリ大夏遠ク見ユトイヘリサレド大路ニ灰
燼吹落ル故イワキテ帰宅シ中橋上榎町へ見
舞シニ長片存ナトモセス居ルユヘ風ツヨク
筋ワロシ後ノ物ヲ納メラレヨトス、メテ淡
町マデカヘリシニ火ハ増上寺ニ飛テ山内ヤ
クルト聞テマタ榎町へ至レハ又トビ火有テ
ハヤ通町中通リへ焼来ルトイフ神速ナリシ

ハ飛故ナリ風ハ益ハゲレリ破利ヲ飛バンタ
方ニハ火袋ヲ所トモナク浅州ノ方ヘ向ヘリ
○此若途中ノ小取物と以テ盲人或ハ物と以テ信果の
家ノ者あり又盗賊行リト又物と以テ信果の
人と傷ム

江戸中が火端ニ成田不動寺

フルハアマクニツクハ宝剣

○十一月十三日未五ツ村普徳所ガ
カフク師
友水ノ森

トテ出火して探町ノ河大坂町志古河川町延

徳町坊売町にて焼
古庄志徳焼
出ノ右殿と共ノ焼出

此年没難い人方
玩談人到着の日

カツラ屋友九郎此時火元ナルニ土蔵戸前ヲ
歩シガ衣ヤケ落テ歩毀サレタリコレヨリ高
砂町へ引移リ又其村ヲバ忘レタリ此友九
郎金主ニテ普徳町河岸小芝居ニ金玉娘ト云
親セモノニ出テ、前ハ墓カレリ之ノ能変ニ
大ニ評判アリテ見物多カリキ友九郎コレヲ
妻トシ彼腫物ヲ療法スルトテ庸医ニアヤマ
タレテ死セリトカヤ
十二月廿七日は鍋火之用心云々且近比盲人
按摩非人ノ類へ疵有逃去ハ者被ク坊云々

進々中候様ヲ以テ取廻り嚴重ニ致シ心ヲ自
女モ致シキ類ハ召捕可畏出矣 午前業文
坊間落書

実トト樽在大層ガ思ヒツク
上ハケチツク下ハイキツク

又將基徑ニ振シテ

全上ル銀下ルヒ下ルヤリヲツク前ナルツ
マール

文化四年

○二月の頃より品川右橋向の折居何来とい

へは驛舎の抱飯盛を了 七年本等強行といふ
府中の産也

り子衣類對丈無六尺七寸容を 新り

更として遊客多く時毎日取禁昌とて 後二年迄
廢是た

この春小島石と注腕と改め浪平折居所の向
へ大女の力持と号し之を物小出と譽無と以て
権柄の火を消し又右浪平始へといふ付く文字と
言なと一けし又右浪平始へといふ付く文字と

大女ハビノ浪平ハ夕ゴ町花鳥葉屋ノ所ニ見

セ物トス西酒橋辺ニ出タルハ男ニテカツラ

ヲキテ録表シ白粉ヌリタル穢キ一限リナシ

コレモ看板ニ大ナルコマゲタヲ出シタリ

○三月九日就作者南吳仙楚満人卒 美心先院
子孫

楚滿人ハ手習ノ師トヤラ聞シカ室覺ニヤ
 文化四年四月廿四日野別里利郡上川崎村
 百姓逆八儀家ノ印ニ十八歳去歲年三月六
 日老母ヲ看病シ後盗ヲ捕ヘ數ヶ所藏ヲ受夕
 リ山々鉄五郎在代官所其方數年負節ヲ守リ
 習妹ニ奉行ヲ其レ其上去歲年三月六日盜賊
 三人這入ル御妹既ニ命ニ可及所ヲ圓ニ盜賊
 ヲ支押ルル始末女ノ月分ニ孝心ノ至健亂成
 仕方ニ付為由褒美是迄所持具ハ高三石余田
 畑永代ニ付毎ル年貢諸没共免許シ上金五十

兩被下之 卯年四月廿一日

高年報去地 廢勅ニ付六月廿一日高年寄候田
 候 往地へ 往祭駕アリ

○八月十五日 漆川八幡宮祭礼 陽年小陽一付

喧嘩下下休したる一ふ七年前久ゆそ 雨天うて

十九日小庭より日産子の町に 夕夕踊り物

おと出を江戸中ハワッハ乃々ハ在りて又お

出た 壹四時 蘆葺島の出 佐物 永代格の 東法と

来て 一時 橋上の 佐菜 孫園 群集の 民出中と 漆

川の方へ して たる おと 同祥と 踏前 したる 中 暑

官有る事原く令とくして水中死散と引揚一先
云く

人込ノ所一ツ橋殿は通行とテ後橋落ル世時
點彼町辺ヨリ程遠カラ子ド重比ハサレタル
怪我モナキ様ニ風説セレガ次身ニ大妻ノ由
沙汰アリケレバ聖於行テミフルニ橋佳明地
河沼ニ男女別ナク積タリ尋子妻リソレカ
コレカト求ムル者死骸ヲ持帰ル者性甚混雜
イハレカタナク其後ハ暖城町ノ河岸番ノ同
ニ折ヲ定メ流死人ヲ置キ町家ノ方伍役所出

来テ引渡アリ大橋又ハ兩個橋ノ方ハカツキ
軒コト夥シ

落書様ニアリ

仲祭へ行ノ、道ハ近ケレド

マタバシモ見ズ橋ノ落タテ

橋上群集ニテ橋ノ落タルヲ察ナル者ハシラ
子ハ押カケク行トキ既ニ落シトシタルモノ
一人口ヲ接テ振上タレハ足ニテ余程人ヲ止
メシトゾ折ラシ沙フカク落タル人多女早ク
ワカラズ沙引ニシタガヒテ流レケレ氏多キ

人故集り群りタリトイヘリ
梳取ヲ用ヒテ細
ヲオテ引タリ

○蝦夷地騷動の事

赤死ト落死ヲスル海ト河
エゾハ箱館江戸ハ箱崎

